

殿山雜藻

11  
481

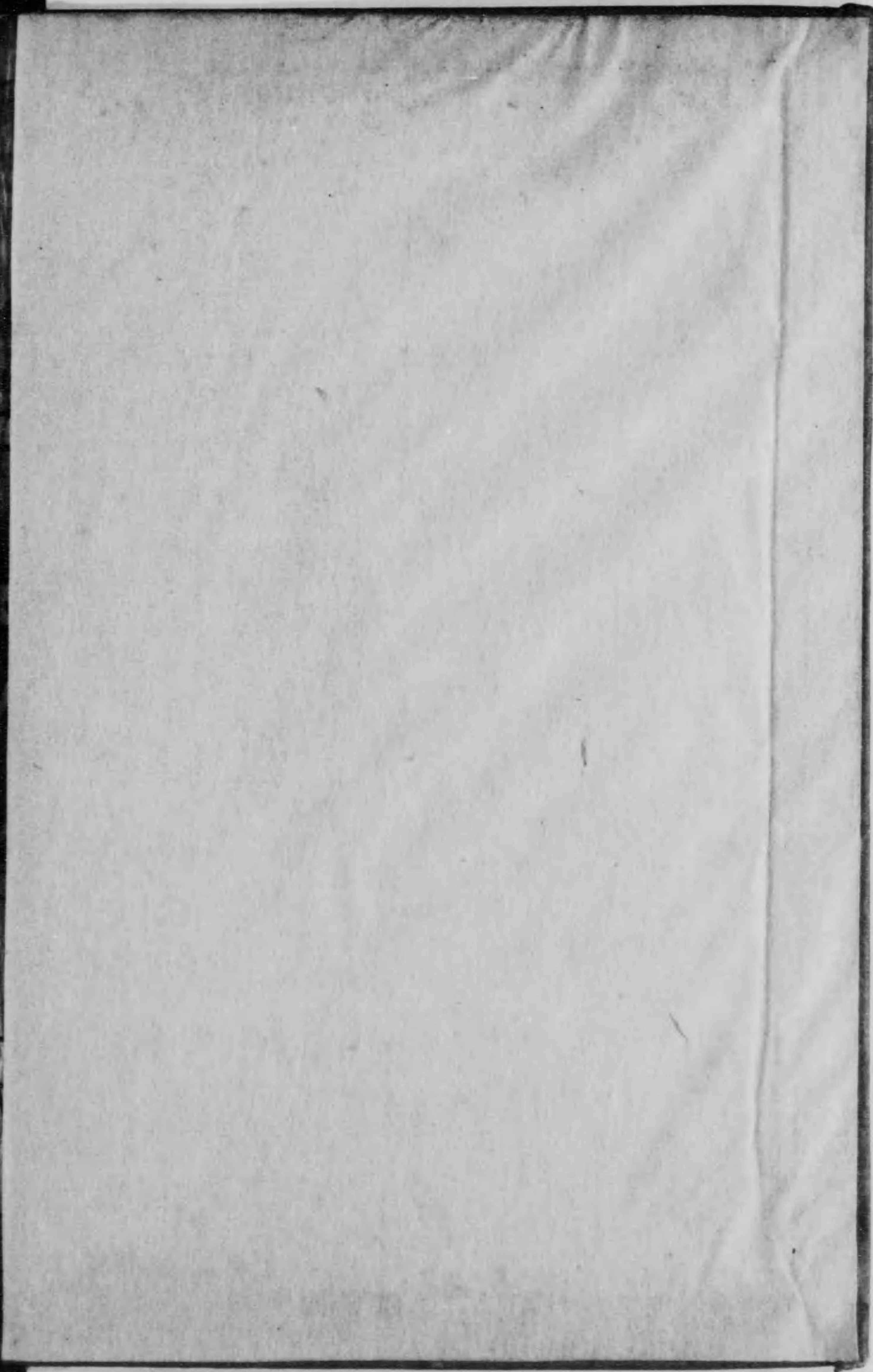
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始

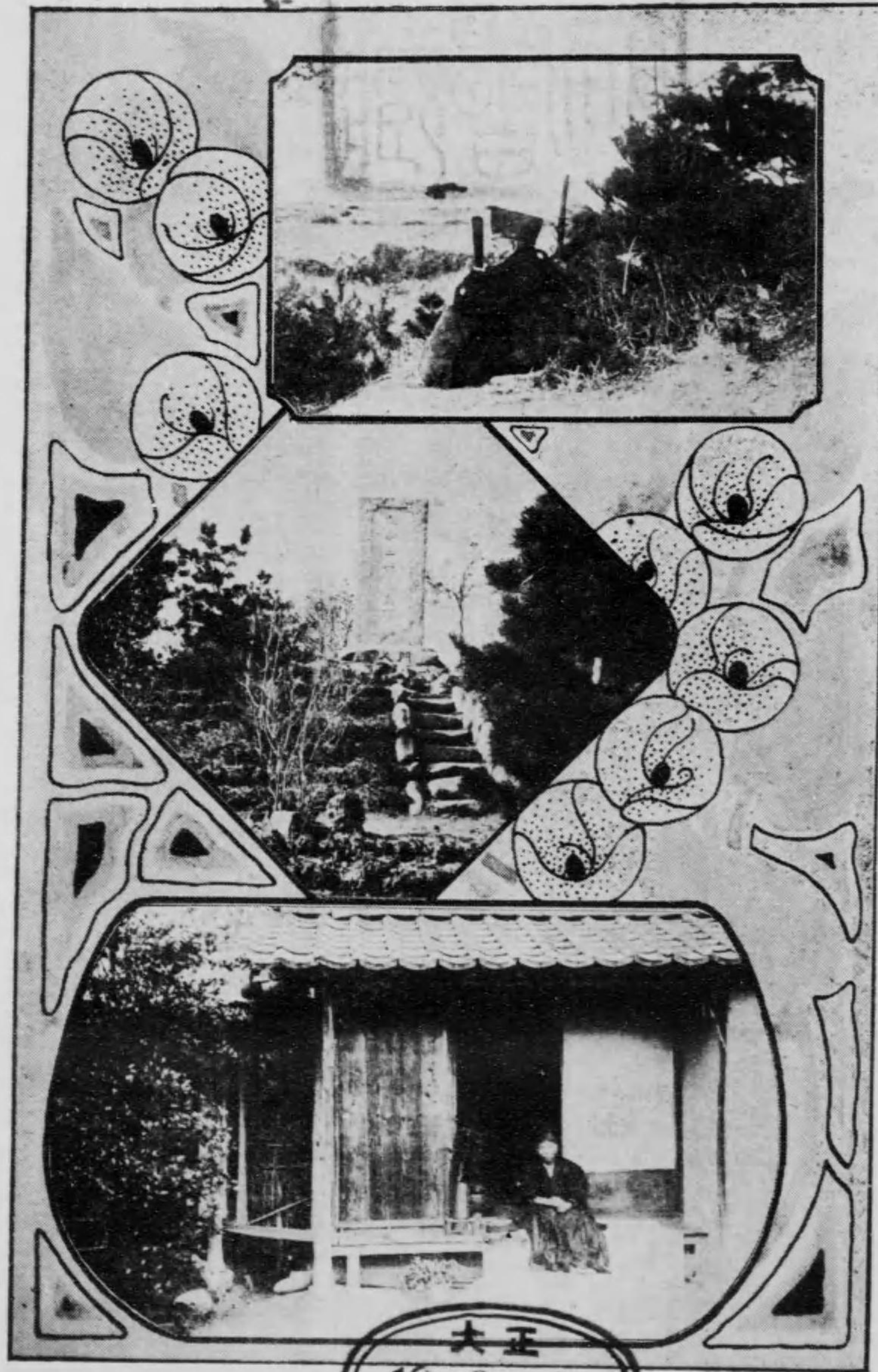




殿山雜藻



11-481



大正  
10 8.13  
内交

## 序

戦後世界經濟の變調と矯激思想の横溢に鑑み、民力涵養、地方改善、生活改造、社會教育等の聲が國民精神の緊肅を促しつゝあるは洵に喜ぶべき傾向なり。今や名利物慾の外に立ち、獻身報國の赤誠を捧げ、犠牲的氣魄以て社會の善導薰化に努むるの士尠からず、以て民心の肅清、國家の發展を期すべしとするも、更に至盡至忠身を以て國に許し、皓潔玉の如き渾身の至誠を以て奉公したる偉人の功業を瞻仰せしむることは、民族精神緊肅上缺く可からざる要素なりとす、矧んや其功業が過去歴史上の片影にあらずして、現實に其風貌に接し得べき人物の活きたる事蹟なるに於てをや。

本郡長炭村に隠れたる勤王の志士あり。三好京太郎氏と稱す、滿身維忠誠の權化にして亦殖産教育の先覺者たり、元郡長北野右一氏其篤行を聞きて感憤する所あり、其事績を録して一は以て世道人心の維持を謀り、一は以て其精忠芳烈を後昆に傳へ

んとす。誠に機宜に適せる美學と謂ふべし。

頃日其編者川崎叱天氏余を訪ふて序を求む、余は曩に北野氏に對して本事業遂行上一部の後援を約せしもの、敢て筆を執つて是に賛する意志なかりしも、編者が切なる希望黙止し難く、其剴削に當り余が本事業に對して懷抱せる一端を披瀝して敢て卷首に冕す。

大正辛酉初夏

鎌田勝太郎誌

### 緒言六則

一北野右一氏嘗て綾歌郡に宰たるや、治下長炭村に隠れたる勤王の志士三好京太郎氏あることを知り親しく之を殿山の閑棲に訪ひて其風手に接し其至蓋高潔なる操持に動かされ其温雅にして風尚ある詩歌を賞し、其忠誠の事蹟と共に是等の文彬を輯録し、以て一は世道人心を裨益し一は蓋臣の芳烈を顯彰せむとの志を懷くや久し。

一貴族院議員鎌田勝太郎氏嘗て北野氏と語り談偶々三好氏の事蹟に及び、嗟歎欽慕の情切なるものあり、曰く幽谷隱君子あり久しく其芬香を傳へず、我郷黨斯る偉人ありしを識らざるを恨とす、費途は我進んで其負擔に任じ以て此報國的事業の經營を助けむと。議熟して其調査纂録を予に囑せらる。

一予素より操觚の任にあらず、然れども嘗て時事に慨して冠を掛け、微力を社會教育の透徹に注ぐこと年あり此種の奔走は最予が抱持の體現に合ひ更に最多く予か好尚に適するものなり、即謝劣を願みずして其囑に應し、實地に就て探討する所あり、筆を起して五閱月、漸く其稿を脱することを得たり。

一本書載する所の詩歌は、三好氏の篇什全部に涉らす稍省略したるものあり、是編者適意の收拾にあらずして文稿時に明瞭を缺ぐものあり、或は後年の追憶に基きて補記したるものにして字句往々脱落したるものあり就て之を訂したるも頽齡既に意識の衰耗を來たし、其正鵠を捉ふるに由なかりしに因す、従つて篇中の字句

時に編者の想定に成るもの二三あり、若誤謬句の存するあらば、校正の疎漏と共に其責編者に在り。  
一本書巻頭三好氏の閔歴は親しく其病蔭に就いて聴聞したる所を經としたるも、年代及び場所に於て時に臆臆の嫌あるものは、遍ねく其所藏記録を涉獵し考証推斷したるものを緯とせり、識者の寛宥を乞はんとす。  
一本書蒐録の事實發查に際し長炭村長平田恒太郎氏長炭尋常高等小學校長篠原榮次郎氏が多大の援助を與へられたることは、鎌田北野両氏の功績と共に永く記念すべき点なりとす。

大正十年六月

編者 川崎 叱天 誌

# 殿山雜藻

## 三好家家譜

川崎 叱天 編

其先は甲斐源氏新羅三郎義光に出づ、義光五代の裔に小笠原長清あり、長清の次子孫次郎長房阿波の守護と爲り、其八代の孫信濃守長清阿波三好郡に住す因て三好を以て氏と爲す、爾後數世三好存保に至り土佐の梟雄長曾我部元親の爲に滅さるゝ存保三好新兵衛と共に讃岐に奔り新兵衛は三野郡西川土居の城主となり、其後裔新九郎式部少輔大阪陣に従軍し其他一族擧つて徳川氏と戦ひ多く斃る、大阪落城の後子孫所々に散在す、新九郎の子熊一丸稻毛の郷に來り住み新平新四郎二代を經て長治長光光清に至り鷓足郡炭所西村に來り住む、其後五代の裔を京太郎と爲す。

## 幼年時代

京太郎名は義清殿山は其號なり、弘化三年正月十七日を以て生る、幼にして書を好む、然れども家貧にして學に就くこと能はず、日々三好玄忠の塾庭に遊び他人の讀書するを諳記す、某日父に従ひ榎井村に赴き、夜中大學を諳誦しつゝ歸る、忽ち後方より聲あり、若輩何をか言ふ、義清徐ろに答ふるに實を以てす、父遅れて至り



兒の無禮を謝し熟視すれば日柳燕石なり、曰く敢て無禮なし、而して兒は君の子息なるかと、父素より燕石と相識るや久し、具さに状を告げて笑談終に家政に及び、約して燕石の學僕たらしむるに決す、時に四方勤王の士輩出して燕石の門を叩くもの多し、松本謙三郎藤本津之助高杉晋作等前後して來り王政復古の大計を議す、謀議素より秘中の秘に屬す、而して只義清のみ侍座を許さる、故を以て夙に復古の大義を解し又先輩忠烈の士に依つて志氣を鼓舞せらるゝもの頗る夥し。

### 天の川の激戦

文久二年八月二十五日義清時に年十七日柳燕石一封の手翰を授け、且曰く汝大和天の川の陣營に至り此手翰を交付すべし、苦戦に接せば幕兵一人たりとも倒して死すべしと、嚴命磐石より重し、義清奮躍死を決して燕石に訣れ、九龜より便船に乗じ室津に船を捨て、陸行す、幕兵の物色太だ急にして浪士の舉動を探知すること嚴なり、義清晝伏夜行の苦楚を嘗め間道を辿りて九月七日漸く天の川口に近づく頃、五條の戦酣なりとて殺氣天に漲る、義清無事燕石の手翰を交付し直ちに五條を指して走り、幕軍に斬入り奮戦三晝夜に及び、幕兵の爲に面部鼻側に負傷し流血淋漓たるも屈せず、敵と組みて橋上より河中に墜ちたるも遂に之を刺したり、其墜つるに當り痛く頭蓋を撲ち且腹部に創傷を受けしも、幸に落葉枯枝河底に堆積せしより一時全く不省に陥りしも蘇生し、勇躍岸に登れば怪僧按劔坊欄干を引折りて奮撃突戰忽ち十數人を倒し幕兵辟易して近づくものなし（按

劔坊其名を逸せり謂ふに熊野又は大和の僧侶ならん義清と共に京都に在つて勉學約一年、因て相識ると云ふ）按劔坊聲を勵まして曰く此處に戦ふも益なし、間道直ちに生野銀山に赴きて同志に合せよと、偶々流丸飛來して按劔坊の左肩を貫く、坊曰く事此處に至る我は此地に最後の決戦を試ひべし、請ふ我殊死の状を見よと、即ち右手に三尺二寸の大刀を振翳し躍つて敵軍に闖入し終に其行く所を知らず、義清涙を揮つて疾驅脱出し生野に志す、道梗して通せず數次危機に瀕す、幸にして大和商人にして燈心を嚮く者に遭ふ、即ち其擔夫に變して京都に出づるを得たるも、銀山の義軍敗れて施すに術なし、恨を吞んで歸國し詳かに燕石に復命す、燕石亦嗟歎禁せざるものあり。

### 眼疾北征を沮む

義清面部の負傷癒えたるも頭蓋打撲に因する腦疾を患ひ又數次眼病を發し暮夜明を失するに至る、而かも燕石の愛撫は日に加はれり。

高杉晋作變裝して京都の紅商と稱し長谷川佐太郎の家に投ず、日柳燕石、美馬君田等相往來して國事を談す、而して義清の外給仕するものなし、事發覺し高松藩の捜査益急なり、燕石終に亦捕へられて獄に下さる、只佐太郎のみ難を免るゝことを得たり、義清家に歸り後高松藩士の僕と爲り、密かに燕石を脱出せしめんと謀りしも果さず。幕府政權を朝廷に奉還するに當つて燕石亦赦されて京都に出で義清亦從ふ、木戸孝允品川彌二郎伊

藤博文等の同志相會して謀議する所多し、義清亦常に其席に列す、明治戊辰仁和寺宮征討總督として越後口の賊軍を討伐し給ふや、義清は木戸日柳等先輩より北征從軍を促されしも、眼病復發して壯圖沮み、空しく故山に歸臥して夢に鯨鯢を斬るの痛恨に泣けり。

### 東都に於ける交遊

明治十二年品川彌二郎の招きに應じて東京に出でたるも、腦疾再び發して激務に堪へず、靜養の傍副島種臣福羽美靜岡本監輔等の諸氏に就き詩歌を學ぶ、詩作多く岡本章庵の評あるは是が爲にして、亦福羽子爵より宮内省出仕を懇請せられたるも其縁に基す、其家藏

心をも身をもつくしてみなと川

美 靜

人の鏡となりし君かな

の題識は義清が特に楠公の忠誠を欽仰し、己も亦其歌意に因みて

湊川身をつくしても仇波を

くたく心のふかき君かな

と詠じて珍藏せるものに係はる、更に副島伯爵との交遊は極めて懇なるものあり、嘗て伯と約して陋屏敢て辭せず、伯親しく義清を訪ひ膝を交へて往事を談せんと、然るに故ありて果さず仍て伯より贈りし書信に左の題

額を以てせり。

### 入章出筆

種臣 南山以爲

拾葉乎

在京數年痼疾益募り復國事に奔走すること能はず、遂に辭して故山に歸る。

### 渾身に燃ゆる忠誠

故山歸臥の後自ら殿山の地九段步餘を開拓し、耕樂亭を建て、居り、詩歌に親み文人逸士と交り悠々自適の傍ら郷黨の子弟を薰化し、又私立有成學校を殿山に移して専ら後進の教育に努む。

明治二十七年日清の國交斷絶して砲火を交ふるや神護に依つて國難を救はんと、翌二十八年一月より毎月一回十日を期して金刀比羅宮に參拜し以て國家安全を祈ること滿二十五年、大正九年一月以降衰老の爲に遂に志を果し得ざるに至れり、今其記録に徴するに

三十二年三四兩月は弟松藏死亡の爲不參し七月に至つて其補參を行ふ

三十六年三月眼病の爲代參、閏五月疝癰に罹り不參

三十七年正月四日より露國事件戰勝を祈る爲日參講を組織し翌年八月解散

大正元年八月御大喪に付謹慎を表して外出せず仍て不參



大正二年五月二十九日月參の外に 今上陛下御恙御快方御禮の爲參拜  
三年三月二十七日月參の外 皇太后陛下御恙御全快御禮の爲參拜  
三年八月三十日より長谷川佐太郎との約を履み獨逸と交戦中毎月三回參拜  
七年十一月十九日獨逸敗退に付御禮の爲參拜  
の特殊事項を加へ、悉く金刀比羅宮參拜章を押捺しあり、至誠忠悃の峻烈以て觀るべし、茲を以て全社は深く  
其德行を感じ御紋付木杯に賞狀を添へて贈れり。

綾歌郡長炭村大字炭所西

三好京太郎氏

爲國家安全祈願去明治二十八年一月より引續き當宮へ月參候條

奇特に付特に木杯壹個を贈與候事

大正五年六月

金刀比羅宮社務所印

是より先き義清長谷川佐太郎と約あり、若國難あれば此笏と冠とを用ゐて天地神明に祈願すべしと、二品保管して家に有り、日露の國交破れて皇軍海陸並び進むや、時嚴寒なるに關せず、毎夜午前三時土器川の上流木の崎川の深淵に投じて潔齋し直ちに殿山に歸り天拜壇に到り、衣冠を着し笏を捧げ、更に其夫人をして燕石の佩刀を捧げしめ戰勝を祈ること七晝夜、其報國盡忠の熱烈斯くの如く義清の渾身悉く皇室と國家とあるのみ。

### 先覺したる憂國の立策進言

義清常に士氣の頹廢して文弱風を爲すを慨し、厲聲叱咤其鼓舞振興に努め、又國家の前途を憂慮して國本培養の策を樹て當局に進言すること數次なり、其編する所の「青年方向事實七章」は忍耐、犧牲的精神、四恩報謝、勤儉貯蓄、女子の貞操等を痛言し「世界前途實記」は其七十二歳の記録にして世界文明の推移を人の一生に比較し、帝國の位置上より其國威進暢の所以を叙し、更に世界は六七の強國に分割せられ其覇者たるべきものは帝國なりと斷じて國民の自重奮起を促し、時の宮内大臣及び鷹司公に進達せり。  
義清は常に議院の腐敗は選良の墮落に在りとし、普選論の聲未だ揚らざる大正四年の頃、既に讃の山間より選舉革新の急を叫べり、左記は義清が閩々の情に堪へず、長炭村長平田恒太郎を訪ひて開陳したる意見の録取書なり。

普通選舉に關する三好京太郎氏意見録取書

大正五年二月七日三好京太郎氏村役場に出頭左の如き意見を述べ相談ありたり。

此頃開會中の帝國議會衆議院に於ては、種々の出來事議員の收賄、或は國家の政務に參與せる大官に於て瀆職其他色々の問題起り、外國に對しては面目なき次第憤慨に堪へない、是全く國家の政治に參與する所の衆議院議員選舉の方法が宜しくないを考へる。

現今の選舉權は納稅額、年齢等に依り制限せられ居り、人口百人に對し二人位の標準であるから、候補者の内には選舉民の信頼徳望なき者は非常に運動して多額の運動費を入れ當選したものがある、爲に議會中金錢の爲に迷ふて種々な事が出来る、依て國民普通選舉として一般に投票せしむる事とせば（年齢、教育程度等を斟酌して制限するは宜しからむ）選舉有權者の數が非常に増加するに依り、到底金錢の力では當選することができない様になる、眞に價値ある學識經驗徳望ある立派な議員が當選して國民の意志を代表することになる考であります、依て此事を各大臣に開申しようと思ふ、村長の意見は如何であるかと。

右に對し村長としては、意見は御尤なるも法律の改正には一定の法規あり、又意見の開申請願等も順序のある事ですから、直接大臣に書面を出す事は宜しくないから、順序を経て提出する様にと答へ、尙御意見の点は機會あらば取次ぐ事に致すと慰めたるに満足して立歸りたり。

義清亦人口増加に伴ふ食糧の不足並に有事の日に於ける貿易杜絶の危厄を慮り、食糧の調節と其貯蓄とに依つて、常平倉的の運用を施すべき必要を認め、嘗て七八年以前上京の際之を大隅侯爵に提議したることあり、爾來久しく其所信を公表して世人の覺醒を促せしが、世界大戰の教訓に刺戟せられ世を擧げて物資の自給自足を唱ふるに至り、終に大正八年六月を以て其年來の主張を披瀝して官府に建議するに至れり。

乍恐爲國家一言御相談申上候

扱今より二三年の内は心配もなければ十年の後には諸外國と聯合して大軍を動かさねばならぬかと心配致し

ます聯合の仕方によると我國は外國米を買入れ難き事に成りはせぬかと心配致します夫れに付けて經濟法を設けて今より糧を貯藏する事を教したれば安心であると存じます

#### 糧を貯藏する經濟法

一農家一戸毎に秋糧を一斗つゝ貯藏するに扱一斗は米五升此れを十二箇月に別れば一箇月四合一勺餘之を喰出す法は澤山あれど先づ二三を擧げて申せば麥を一日に一勺五才多く入れ又は米を一勺五才減じ而して一年を経れば五升四合喰出すことになります今五六人の家族にして麥一勺五才多く入れたのも少くないのも味には變りなく麥には蛋白質の多き爲却つて身體は壯健になります

又野菜や大根を入れ雜炊を一箇月二三度煮て食せば五六人の家内なれば壹箇年に米壹斗喰ひ出すことは容易いことである

又餛飩を一箇月に一度粥を一箇月二三度煮て食する時は扱壹斗位貯藏して一箇年の末には更に影響せず却つて米が延びて来るのである

右の經濟法を辛抱するのは米の食料調節法につき七日毎に一日槽パンを喰ふ辛抱を思へば何程の事でもないと存じます

右の方法を以て青年に秋糧を戸毎に壹斗つゝ集めしめると今假りに五百戸の村にして内貧家三分ありとして殘三百五十戸として三十五石積めは香川縣貳百町村とせば毎年扱七千石を積む事に爲る又市街の人も國家の爲子

孫の爲を思へば金で穀を買入れ積む事にせば縣下で八千石位は蓄積すること安い事であると存じます然れども初めより穀壹斗つゝ積む事を勤めては誰も大儀がる故初めは穀一升でも二升でも任意にして出来得るものは可成多く貯へさすことにして追々に獎勵法を設けて穀一斗位積ますことにせば宜しかろうと存じます先づ今年の秋から青年を奨めて香川縣より各人の任意にして一郡内一二箇所に集め積置くことにしては如何ですか御相談申上ます

右の方法を日本全國が爲すことに成たれば十數年の末には莫大なる數量に爲る然る時は食料に心配なく大丈夫である此方法に依つて穀を貯へば人民の家も年末に考へて見れば米が三升か五升かは増して居り日本全國では數十萬石も僅の辛抱であると考へます

原公閣下は御頭の善き御方ですから此事には御賛成被下かと樂んで居ります

大正八年六月

三好京太郎謹白

### 門人壽藏碑を建つ

義清閑地に隱棲し未だ高きに在つて鳴かず又廣きに在つて蜚ばず、故に其諄々たる言行と其超俗せる卓見とは其性行を熟知せざる者をして時に頑狂視せしむるの嫌ありしと雖、烈々として其胸中に燃ゆる敬神尊皇の至誠と憂國慨世の熱情とは、悉く其行藏に顯はれて衆人瞻仰の標的となり、事苟も皇室國家に及べば端座正襟涙を

以て終始するを常とす、徳化甚だ汎ねからざりしは其境遇の然らしむる所なるも、亦現代得易からざる人格者たり、大正六年十二月門人等相背りて其頌徳碑を殿山に建つ所爲ありと謂ふべし。

子馨夙抱報國之志参加大和義舉戰傷頭而歸遂病矣因是歸農側教授兒童以風月爲樂焉然猶報國之念至老不已是其志存也子馨名義清稱京太郎殿山其號也其先出甲斐源氏諱義明通稱甚作母寺内氏諱仁子馨其長男也以弘化三年正月生于讚之瀨足郡炭所西村要岡田村寺内至淨之孫女名松無子養姪兼平宗一而爲嗣門人等相議而建壽藏碑于殿山以表之

大正六年十二月

吉岡正敬撰

### 郡村より表彰す

斯くて義清の徳行日を趁ふて世人の知る所となるや、綾歌郡長北野右一氏は大正十年二月十一日を以て、左の表彰を行へり。

綾歌郡長炭村大字炭所西二二八番戸

三好京太郎

弘化三年正月十七日生

資性剛毅幼にして學を好み日柳燕石の門に入り儒を修め夙に尊皇憂國の志を懐き維新の際勤王の士と交り年十七にして大和天の川に於て幕軍と戦ひ負傷して腦を患ひ終に其志を伸ぶる能はず歸農して荒蕪を拓き農桑

を勧め傍ら家塾を開き子弟を薰陶し報國の至誠未だ嘗て歇まず其郷黨を感化するの功亦頗る大なり依て茲に  
袴地壹反を授與し以て其德行を表彰す

大正十年二月十一日

香川縣綾歌郡長 正六位 勳六等 北野 右一

越わて全年五月十七日長炭村は其篤行を表彰して厚く老後の光彩を添へたり。蓋積善の家餘慶あるもの、以て  
國民精神の肅清を促したるもの尠少にあらざるなり。

拜復陳者尊書御申出之件は早速皇太后宮  
職に移牒之上獻上方取計置候間右様御了  
承相成度此段貴答申進候也

大正二年二月十四日

渡邊宮内大臣

三好京太郎殿

獻歌十首

◎山家早春

柴人かゝつく妻木のうれここに 雪の花咲く春の山路

◎山家聞鶺鴒

山居してたのしきものは杜鵑 里よりさきに初音をそ聞く

◎山居明月

吾かこぞく世を厭はれし月なれば 鹿や紅葉のさやに見ゆらん

◎雪中山家

烟たに立てすは人の住むこ見し 雪にうつもる谷の一つ家

◎同

雪はれし今朝こそ見ゆれ遠方の 竹の葉山の中のいほりは

◎祝國

降り積りごはに動かぬ富士の根の 雪や美國の姿なるらん

◎國光

人皆かいつくに居ても日の本の 光に光る身ごはなりけり

◎恩師福羽美靜云々の歌ありわれまねてよめる

みなご川身をつくしても仇波を くだく心の深き君かな

◎山里に降り積りたる雪に子供等か大日本萬歳ご大字に書きて紅葉の如き小

いさなる手を擴けて躍り喜へるを見ていと嬉しく

さかぬます國のしるしは雪にさへ 子供等か物書く御代ごなりけり

◎雪の中に子供等か紙の旗もて露西亞攻撃の様をなす其雄々しさおのれいと  
嬉しく思ひて

うなる子か手にく雪をたまごなし 戦ひ破る鷺の旗手を

和歌

新年之部

勅題新年山

うらゝかに朝日の昇る山のはの

年の始めのけしきよろしも

勅題新年河

新玉の年立つ今朝は五十鈴川

音も静にすみ渡るなり

五十鈴川音も静に流るらん

治まる御代の年の始めは

治まれる御代を知らせて五十鈴川

すみ渡るなり年の始めに

元旦殿山の麓に若水を汲むとて  
治まれる年の始は山川の

浅き瀬にさへ波たゝぬかな

春之部

子の日に宮本ぬしの家にてよめる

子の日松君かみ庭にうねおきて

田鶴の千代呼ぶ聲を聞かに

雨中古澤に七草を摘むを見て

梓弓めも春雨のふる澤に

なつな摘みけり里の女等

淡雪

つま木こる里の子供か歸るさの

柴に花咲く春の淡雪

春の比雪深く積みける時

白妙に雪降り積る今日はしも

鶯鳴かすは春と思はし

山路鶯

柚か家をさして行身も鶯の

聲の色香に道惑ひけり

水邊梅

谷川の木舟のそさのむすふ手の

水さへ匂ふ岸の梅か香

雪中梅

久方のあまざる雪の降積り

香のみかくれぬ庭の梅かな

梅花盛

梅の花今を盛りと立寄れば

人に知らるゝ移香をする

梅花欲漸散

梅の花移らふ許り見ぬしより

鳥の羽風もいとほるゝ哉

春氷

春來ぬと思ふ許りに今朝ははや

氷もとけてなかる谷川

春色浮水

竹生島花や柳と水海に

うつせる影の春けしきはも

唐崎の松も霞みてさゝ波に

影をうかへる滋賀の海つら

初春山興

松の戸の梅は咲けとも谷深み

雪のふるすを出てぬ鶯

梅の花咲くやと柴の戸を出て、

眺む方より霞む山本

梅の花稍咲き初て鶯を

けふか明日かどまつの下庵

○霞

向島櫻の花もくれなるど

紛ふはかりに霞みあひけり

櫻狩峰もふもとも打かすみ

霞の奥もいやかすみけり

聲はして姿は見わすいと深き

霞の底に沈む柴人

柚か家の軒の煙も見わかねて

霞立ちらふ春の空かな

山本の賤か伏屋もほの見わて

峰つゝき立つ春霞かな

花鳥の春のあはれを吾のみと

霞の袖をおほふさを姫

打渡す春の浦わを撈きて行く

船も見分かぬ春霞かな

引登る船の繩手もわかぬ迄

かすみ合ひたる蘆薈の浦

○柳

古澤の柳の絲のよりくくに

春のみ空はのどかなりけり

川そひに萌ね出る柳春風に

絲よりかけて波にあや織る

行水に影をうつせる佐保姫の

春のかつらは青柳の絲

○山家 春月

山深み春はくれども人は来て

月のみやこる花の下庵

○春 駒

春されは穂坂の牧に飼ふ駒の

妻呼ふ甲斐もなき身なりけり

○目白てふ鳥の鳴くを聞いて

進み行御世のしるしか鳥たにも

一筆まゐると申合ひける

○呼子 鳥

山深み分け入る人もなき谷の

木蔭に誰を呼子鳥かな

○雲 雀

春されは長閑の空をなつかしみ

霞の中に雲雀啼くなる

雲に入り霞に消れて飛火野の

空に雲雀の聲のみそする

春日野の霞と共にたつ雲雀

翅は消れて聲のみを聞く

○待 花

櫻花あたなものとは知りつゝも

咲くほど遠く待わひにけり

○櫻

佐保姫の霞のころもたちかくす

なかに匂へる山櫻花

○延壽寺 糸櫻

糸櫻絲にあつらへ散る花を

ぬき止めなん春は過くとも

有漏路より無漏路に入れば櫻花

散りて知ける老の身の程

名にめてゝ人のよりくる糸櫻

花の盛りは長くもあらなん

○夕 花

夕風に散りかひくもり歸路を

まどはすものは花の怨か

○落 花

夜嵐に櫻は散りて山川に

錦をなかつ春の曙

○惜 花

咲からに散るを習ひの花なれど

しはしと留めん人心かな

○躑 躑

乙女子かあかもの色のつゝし原

日に入りぬれど暮れやらぬかも

奥山をてらす岩ねの花躑躑

樵夫ならて誰かすさめけん

樵夫かかさす深山の岩つゝし

すさめる人の稀なるをしも

野火よりもあかき深山の夕躑躑

匂へる方は遅く暮るらん

茜さす日の下躑躑うなひ子か

かさして歸る春の山道

○牡 丹

はつか草はつかに見初め誰が家の

花をも知らて戀渡るらん

○有明の濱の筆草

有明の濱の筆草いとよろし

春の氣色をかきて見るには

有明の濱の筆草根こし取り

かきて遊ばん春の景色を

楽しさは昨日も今日も有明の

濱の筆草かき集めけり

○春の海

梶の音のつはら／＼にいそしみて

海士か釣する春の海つら

○春山家

憂き事も貧しき事も忘るかな

春の山家は花鳥を見て

○社頭藤

瑞垣に咲ける藤波なみならぬ

清き匂を神やめつらん

○暮 春

暮れて行春の日數のすくなきを

惜みて啼ける鶯の聲

花鳥の別るゝ今日の山々に

残る霞もうすく成り行

○殘 春

花散りて緑の山に鶯の

いく日の春を惜みてかなく

○三月 盡

鶯や鳴てなりども留めてん

懐かし春の暮るにやあらん

夏之部

○遅 櫻

山深み時に遅れて櫻花

青葉のかけに匂ふ色かな

○朝 卯 花

やよ子供朝きよめすな卯の花に

觸るれば庭の雪と散らなん



○住吉の岸の卯の花を見てよめる  
世をわひてこゝ住吉と来て見れば

又岸に咲くうしや卯の花  
岩蔭の山のやみ路も卯の花の

光に知れてこゆるへらなり  
山蔭の通路さへもまごふなし

○新 樹  
卯の花月夜さやけかりせは

秋山の紅葉の色に先たちて  
哀を見する若楓かな

○新樹勝花  
春雨に移らふ花の色よりも

○聞 新 鶺鴒  
猶なつかしき若かへて哉  
藤波の花をめてつゝ行方に

春日野の草間を分けて行通ふ

空に鳴つく山杜宇

○杜 鶺鴒 一聲  
一聲の名残を惜しき夕月の

傾くかたの山はとゞきす

○久待杜鶺鴒  
橘の花咲く日より今日今日と

待たるゝものは山杜鶺鴒

○岡 杜 宇  
鳴初めて日數たゝねは杜宇

聲をならしの岡に來にけん

○關ほととぎす  
留むへき人もなこそ關なれば

家路急げとほととぎすなく

○川 杜 宇

今日珍らしく杜鶺鴒さく

○有明濱杜鶺鴒  
有明の濱のひかりを月と見て

過ぎかてに啼く山杜宇  
名にめてゝ闇夜も來鳴け杜鶺鴒

五月雨の闇夜やくらき子規  
月にゆかりの有明の濱

まごはす來啼け有明の濱  
○藤 中 聞 杜 鶺鴒

ねやの戸もまたあけやらぬ我宿を  
過ぎかてに啼く山杜宇

○名所杜宇  
杜宇やみ夜も來鳴け久方の

月のかつらの里にそ有ける  
○野 子 規

杜宇水にうつれる佛を

妹と見るらん月こわて鳴く

○杜 宇 遍  
何地にも山杜宇聲限り

鳴いて飛交ふ五月雨の頃

○月前杜宇  
山の端に傾く月を懐しみ

かなたこなたに鳴子規

○雲間子規  
雨雲の立ち渡りたる遠方こちに

聲のみそする山杜宇

○兩方子規  
をちこちに鳴杜宇何れかは

山彦答ふ聲こそ思ふ

○閑 中 子 規

苔道を分け来る人もなき宿の

柴の垣ほに鳴杜宇

○山里挿秧

早乙女の聲諸共に子規

鳴いてにきはふ夏の小山田

○五月

人皆は野に出て行て小山田も

暫しにきはふ少乙女か聲

鹽籠の煙むら絶ぬ海士さへも

みなど田植に行て見ゆる

○五月雨

田は亂れ岸は瀧なし早乙女の

聲さへしめる心地こりすれ

○水

見し月はまた其處ながら明る夜を

何か水雞の戸を叩くらん

岩間より流る川邊に家居して

夜毎水雞に目をさまさるゝ

○山夏月

我庭の青葉の露に影宿し

涼しく見ゆる山の端の月

夏山の青葉の露に影やとし

玉と見る迄照月夜かな

○池

池水に影をうつして夕されは

玉と亂れて飛ぶ螢かな

○閑居夏草

吾宿の庭に茂れる八重葎

みやびをならて誰か分けてこん

○蟬

暑さをはしのたの杜と寄る空に

松風さそふ蟬の諸聲

○山夕立

麓なる里は日影を見せながら

谷に瀧なす峰の夕立

柴人は家路急げと夕立の

雨脚早く濡れくろ行

○河夕立

河の瀬を下る舟人夕立の

雨に濡れつゝ苦をふく哉

雪けかど問へは富士川奥深く

夕立ふると答ふ舟人

○船中夕立

友舟は苦ふき騒ぐ夕立に

片帆乾したる海士そ有ける

○海夕立

島山の松の片枝に日はさして

あなたの浦に夕立そふる

○里夕立

千町田に水せき入るゝ里の子か

銀流すまで降りし夕立

○野夕立

夏の日に洞ゆる草も夕立の

晴れ行あとの野邊の色哉

○橋夕立

夕立の雨脚早くつくと見れば

急げとぬるゝ瀬田の長橋

○學校夕立

學ひ兒か手つさひしこる折しもあれ

など夕立の降來るらん

○夕立

夕立の雨に水増し瀧津瀬の

音にうつもる鳴神の聲

\*\*\*秋之部\*\*\*

○秋日山居

炭竈の煙棚ひく下かけに

紅葉の色のうすく濃く見ゆ

○秋野邊

秋の野をわれ分けかねつ咲き匂ふ

萩の錦の中をたつれば

○初霜の朝菊を見てよめる

初霜は菊の色こそ感はずれ

如何におく共香やは隠るゝ

琴の音に通ふ松風聞きつゝも

落葉かきたる人のともしく

○濱千鳥

涙の音と共に聞ゆる濱千鳥

友呼ぶ聲のなつかしきかな

○殘菊

もゝよ草百日匂へとうつろはぬ

色香うめつる唐も大和も

○初冬山家

乙女子よ嵐に紅葉ちる庭を

朝清めして錦なたちそ

○雪中松

豊年を迎ふる民のかまご山

松も真白に積る初雪

○山家冬月

○豊年

時津風吹や穂波の打わたし

畦さへ分かぬ大八洲かな

○殘暑

蟋蟀つゝりせよとて夜なくくに

鳴けとも晝は夏心地せり

○山家秋月

世のうきを聞かて山家に住む人の

秋の月夜は猶樂しかり

柴の戸に宿らぬ月はあらねども

秋のこよひの影のさやけき

\*\*\*冬之部\*\*\*

○琴彈山の落葉をかく人をよめる

時雨からくもるも晴るゝ入方の

月のみまれに宿る柚か家

○勅題田家早梅

谷よかみ賤か垣根に雪はあれど

春まぢかねて梅の花咲く

\*\*\*戀之部\*\*\*

○寄石船戀

我戀はてゝ島に通ふ石船の

おもひに沈み渡り兼つゝ

○寄花戀

花ごのみ頼みし物を月草の

移ろひ易き君にも有かな

春雨のふるを忘れて淺間しや

花の色のみ頼む吾はも

人の愛つる花とは知らて朝な夕な

憧れて見る吾は何なり

今日くいと待ちつる花の俤を

ねも見ぬ内に他所に引るゝ

櫻狩かさせる花にならへて

言葉に色を添ふる戀人

移る花に思深めて味氣なや

手折らぬになど袖をひちけん

高く咲く花に思を玉禱

かけてもくやし解けぬ思は

袖ふれて花の香をたに留むれば

うれそと心慰むものを

○初戀

纒にも見初めし人にはつかしの

杜の戀草下に忍ひつ

足引の山田の稻を初かりの

戀に夜なく袖は染けり

浦舟のこかれ初れは蘆の葉の

あしこと繁き夜を苦しける

○忍戀

人を戀ふ軒端に生ふる忍草

しのふの露に袖はひちけり

忍ふれと包む袂に猶餘る

涙に床は舟と浮くまで

○爲人忍戀

吾思ふ人の爲こそ苦しけれ

見る目も餘所に忍ひける哉

○忍通心戀

下紐の結ふも解くも人知らぬ

かくこそ己か心なりけれ

○厭忍戀

世の中の繁き人目を忍ふには

苦しくもあれは詫つゝもぬる

立名こそ苦しくもあれ人知れぬ

忍ふ戀路の有る由もかな

○忍切戀

みちのくの忍ふ心の苦しさに

さても玉の緒絶ゆんとそ思ふ

○忍絶戀

雨雲のよそに忍ひて逢はぬ間に

いや遠さかる己か戀かな

○思不言戀

言はゝへに言はぬ心を苦しける

思はぬ昔を羨まれつゝ

○忍不言戀

忍ふから心咎むる方はかり

いぬはへにのみ戀わたる哉

○觀身不言戀

朝なく映る鏡の影わひて

いくたひ筆を取りて置哉

數ならぬ身の悔しさに焚く蚊火の

下こかれのみ日を送る哉

己か身の貧しき故に蘆根はふ

下にのみこそ戀わたりけれ

○不言所在戀

夢にたに其處と知らせは心たに

通はせ居れば慰むる哉

○欲言出戀

斯とたに岩間に咽ふ瀧津瀬の

たきつ心を如何に苦しき

○初言戀

恥かしの杜の下草下にのみ

忍へと終にはに出てにけり

吾のみや戀しぬるとも人知らて

洩らし初たる事そ苦しき

○言出後悔戀

言はてこそ苦しき中に樂しけれ

何思ひけん忍ひ餘して

分け入れは苦しきものと知らずして

登るもつらき戀の山道

○言初後増戀

心程わりなき物はあらぬ哉

きのふに勝る今日の思は

言はぬ中は如何と許り思ひしか

いや茂り行杜の戀草

洩れそめし苔の下露いやつとひ

流れもあへぬ川となりけり

○馴戀

海士の着る鹽やき衣朝夕に

馴るゝ程よく身に纏はるゝ

○洩初戀

忍へとも心弱しや涙川

せきとめかねて今日洩らすかな

物おもふ人の軒端の忍草

忍ひかねてう露もらしける

○顯戀

包めども袖にも餘る涙川

流るうき名そ苦しかりける

何時しかに包みもらして紅の

袖の時雨の下染となる

玉づさの何時ちり初めてなへて世に

名取の川となりにける哉

うたゝねの跡に落ちたる玉つさに

つい顯れし己か戀かな

如何にして忍ぶ心の顯れし

隠すは知れる初なりけり

袖人のあるをも知らて山深み

花のみと思ふことの悔しき

○聞戀

見る人を音羽の瀧の音に聞く

うとき戀する我や何なり

消果つる心地こそすれ音にのみ

さくの白露手には取られて

人傳に聞くもゆかしき其ことの

誠やいかにと疑はれける

○城外聞戀

聞からにをのゝ篠原しのふとも

尋ねて見ましわか思ふ人

草枕旅なる人と聞からに

たつねても見ん三輪の山本

○聞戀我戀

君か先あすはの神にこしはをは

さすと聞より我も戀しき

引く墨の色にそ先は見むにける

君か我戀ふ事のうれしき

○不聞戀

つてにたに聞こそ戀し今はたゝ

音羽の山の音つれもなき

戀しさよつてに聞きたにつらき世の

昔のことを思ひかへして

○見 戀

行舟のほのかに見わて呼かへす

聲も届かて戀渡るかな

難波江のあしの仄に見しはかり

いひ出す由もなきを悲しき

○初 祈 戀

はつかしの杜のしめ縄かけ初て

長きちきりを祈りける哉

神垣にかけ初め祈る注連繩の

長きちきりを結ふと思ひき

○初 祈 請 戀

今はとておもひ餘りてゆふたすき

懸けてと祈る神垣の松

○依戀 祈 身

逢ふ事はおほつかなしと思へども

若しやと神に祈る命か

なからへて戀ふそ苦しきこの神に

祈りてならむ憂き知らぬ身に

○尋 戀

尋ぬへきしるしの杉もなき宿を

まいわたる身を苦しかりける

三輪の山戀路のやみに踏みまよひ

しるしの杉も尋ねかねつる

○名 立 戀

人は只名にこそ立てれ吉野川

妹脊の中を斷つも知らずて

○立 無 名 戀

おとにのみさくの白露何時しかに

散りて名取の川となりける

○歎 無 名 戀

思ふのみまた見ぬ人をなともかく

世に逢坂の關やゆるせる

○惜 人 名 戀

名取川名はなかさしよくるしくも

人の爲には身を沈むども

○人 傳 戀

折よくてつけてかへると言の葉に

あやあるらしく疑はれける

わかこふる涙の河のかはたを

風にもつけよ登る舟人

○久 戀

來ぬ君をもしやと横の戸もさゝて

ぬる夜積りて年月となる

○舊 戀

鴛鴦のおもひのはねをふる川に

うき流れつゝ日をわたる哉

○經 年 戀

さても世にうき年波のよる身そと

人知るらめやわれし言はねは

物思ふなみたの衣いくたひか

朽ちにけんかなおのか袖はも

○不 逢 戀

山かつかたくはたのこさしもあはす

燃る思ひを人や知るらん

さりともと思へど猶も戀しけれ

逢ふこと難き命なりせば

つれもなき人とは知らてかたし貝

かた戀にのみ命しにけん

○初夜逢戀

三日月の影さへいとふ戀人の

逢ふて嬉しき小夜の手枕

○逢戀

わするなよ行末契る新まくら

ねし床の枕のちりも今よりは

○邂逅會戀

つもらぬほどに逢ふよしもかな

敷妙のまくらの塵をはらひつゝ、

昔のこともまたかたり出つ

なか月の長き夜さへもたまさかに

相かたらへは短かりける

たまさかに待わたる夜は嬉しさに

夢かど又もうたかはれける

○辭後會戀

雨雲のよりに行かと思ひしに

會ふてうれしく袖ぬらしけり

○逢不遇戀

此まゝに戀やわたらん逢ふことは

なみたの川に身を沈むとも

○契戀

心見よ契りし後はかはるまし

末の松やま波は越すとも

○誓戀

ゆふたすき神垣かけてちかふとも

まことならては頼まれもせず

○疑戀

ことのはのよくうつるごもいかならん

人の心のそこを知らねは

○待戀

かならずと契りし人をまつの戸に

いつはり告くる鳥のこゑ哉

○不堪待戀

待つことの苦しくあれは待乳山

松のつゆより先ろ消わける

逢ふまでの我玉の緒もたのまれず

如何に苦しき人戀ふる身は

○稀戀

逢はぬまの月日かさねし年波の

なみくならぬまれに逢ふ哉

敷妙のまくらのちりも年ごとに

一夜ははらふ事もあるらん

○別戀

いそくなよ別れし後は戀ふるごも

露のいのちをたのまれもせぬ

うらめしなこゝろも知らず鳴鳥の

聲に今はと別るくるしき

○悲離戀

人は皆さらぬ別れのあるものと

おもふ方より先ろ悲しき

別るごも世にある人は音羽山

音にも聞くをなごか戀しき

○後朝戀

戀しさのますみの鏡見るたひに

かけに残れるこゝちこそすれ

まくらつくつま屋に入りてきのふねし

移香をするとふのすかこも

○増戀

ぬは玉のやみのうつゝに又夢に

おもひろ茂き杜の戀くさ

○切 戀

今更におもふ甲斐なきよとなれば

何惜しからん命なりけり

○昨絶今會戀

おもひきや君になさけをかけ慢の

けさわけて早相見つるとは

○思出切戀

わすれしよ玉手指しまさねたる夜の

君かおもかけ晝も見ぬつゝ

去年の秋稻葉の露のおきていぬ

君かすかたを戀もしぬかな

○思 戀

戀しさの涙にまさる思ひ川

うきわたる世のくるしわれかな

○初疎後思戀

まことこそおこなひに見わなす事の

初めおもひは頼まれもせぬ

○思移媒戀

わか思ひうつすもくるし媒の

ふかきなさけのある由もかな

○片 思 戀

うき事もありろの海のうつせ貝

うつすよしなし片戀にして

玉くしげ二見の浦のかたし貝

かたおもひにそ人を戀ふ哉

わかのうらのふるきくたけのわれ貝の

我のみ人を片戀にける

○亘片思戀

わか思ふことくは人やおもふらん

行ちかひたるかりの玉つさ

○厭 戀

むへならんわれさへ厭ふうきなるを

人に如何てか思はしむるや

○厭 身 戀

おもふそよ人のつらきもたのか身も

いとふはかりに心まかせて

○被輕賤戀

くるしそよわし事繁きあしの根の

したに隔てもなくわたる世は

まつしさにわれをおもひの増鏡

むかふかけたに如何にくるしき

○悔 戀

かくはかりかはるも知らてうき人に

思ひつく身の我うはかなき

○忘 戀

わか思ふ人の軒端のわすれ草

しけるにつけて身はくやしけり

○絶 戀

きぬくを重ねて共に見し夢も

今はかたみと思ふはかりそ

絶ててはや久しなからの橋なれや

かけたにも見ぬ人を戀ふ哉

○絶後驚戀

花はみな散しとおもふふるさに

又おそろかす歸り咲き哉

○絶不知戀

飛鳥のあすかの川のかはり行き

似し人も見ぬ君にもある哉

末長く契ることはくちはてゝ

塵ほども見ぬ君かたもかけ



○變戀

人皆のこゝろの色はさためなき

月草なれやうつり安くて

昨日見しみどりも秋の風ふけは

野邊の草葉も色かはりけり

○契變改戀

飛鳥川あすと思ふはあした櫻

あらしに散りて名のみ流るゝ

契りおきし居待の月は出てしかど

見に来る人の影たにもなし

○臨期變戀

時過くと庭に出つれば風ばかり

我袖にのみ時雨ふりけり

契りたる時やたかふとさゝかにの

くもの振まひ引かへて見ひ

○臨期違約戀

此くれと言ひて契りし言の葉に

秋風吹きて色かわりけり

契りおきしことはも今は色かはり

秋の露おくおのか袖かな

○恨戀

うらめしやつれなき君をつくし楠

さして思ひのとけぬ苦しき

つれもなき人とは知らず初め

身にいたつきの入れる今日哉

われこそは見るもつられ吉野川

いもせの中をへたて流るを

○隠戀

雨雲のようにたち行いつ方に

身を隠すらんわか戀ふる人

○不語終隱戀

見る目には何か心に思ふらし

さても物せて日をたてる哉

○無二相語戀

松山の波ころ末は定まらね

契ることはは常磐色なる

○白地戀

若草のめのはつか草はつかにも

見て手をふれす君はかへれり

○詭戀

ことつてし人のことはに難波江の

あしのは交らむ事を社思へ

○争戀

契りてし言葉にしるしなきとして

今偽れる心はちすや

○負戀

淺間しやつれなき人を頼まれて

心くらへも弱る夜なく

○占戀

さゝかにの糸ひく笹のうらみても

影たにさゝぬ人をつれなき

○老戀

逢ふことのは命は何かせん

長くもあらぬ老の身なれば

○幼戀

今年生ひのまたふしなれぬなよ竹を

手なれ留めんと末たのめする

○遠戀

待詫ひてひくや岡邊のくつかつら

遠くも絶わすくる由もかな

○近 戀  
おもひこそあたし野の露軒ならへ  
近くて遠き戀のみちかな

○旅 戀

心こそわりなしと見ね旅に居て  
故さと人を戀ふは何ろや  
放れ鳥行術も知らぬ旅人を  
かつ見て戀ふる淺間しきわれ

○夢 戀

苦しやな夢にこゝろのうき橋を  
かけて夜な／＼通ふ吾身は  
夢にこそ思はん中もかたりあへ  
現てふ事のなきよしもかな  
思ひねの夢の契りを末たのみ  
さめて現に悲しかりける

芦間漕く海士の小舟のちちおとに

夢をさましてたつ鷗かな

島影はまた明けやうて漁火の

光たのみに漕く海士小舟

あみの浦に汐みち來らし海士小舟

引音近くあ子の聲する

○琴 瀧

谷水の波のをすけて山媛の  
調へたせぬ琴の瀧津瀬

○富士山

何時も／＼吾來て見れと駿河なる

富士の高根はいゝも得られず

吉原ゆけさ打見れば雲の上に

蓮の花にまかふ富士のね

○山家煙

\*\*\* 雜 之 部 \*\*\*

○山中瀧音

棹鹿の妻乞ふ聲も埋れて

聞分かね迄とよむ瀧つせ

○關路曙雲

今も猶昔なからに東雲の

雲のとさせる逢坂のせき

○布さらしを見て

有明の氣色もよそに乙女らか

赤もひちつゝ布晒しけり

眞清水に晒せる布のいと白く

吾の心もたくへてしかな

○海邊雜興

斧音も稍打たわて柴の戸に

ゆふけの煙立昇る見ゆ

○田家煙

榮ね行く御代を知らせて山田守る

賤が籠の烟立つなり

葛かつらはひ纏はりし山家にも

かまと賑ひたつ煙哉

○浦松風

和歌の浦によせくる波のしは／＼も

聞かまほしけり松風の音

○有明公園にて

有明によせくる波のしはしはも

見まくもほし／＼おはやけの國

○有明の御假御殿を拜見に

昇殿の時よめる

宮人のかりのみあらか假初の

みす捲く方の春景色はも

○有明濱にて

百千船通ふ景色を筆草に

帆のかきて遊はん有明のはま

春霞分けて行かふ百船の

帆の面白し近よれるほど

打寄する波のしはく見まはしく

有明濱の春の景色を

いつはとは時は分かねと有明の

春の最中の夕暮の頃

玉藻浦いつくはかれと有明の

霞分け行く船の景色は

玉藻かる蜚乙女等か袖ちつ

からき汐路の世を渡る哉

打霞む霞の中に百千船

ほのかに渡るをちの海原

○象ヶ鼻

いかにかも天津御神や造りけん

琴弾山のきさの鼻かた

○琴弾山にて詠める

有明の濱松風は琴ひきの

山のをことを調へそめけり

○満濃池の堤にて

満濃の池波打ちわたし見る方に

ほしくもある哉小舟三つ四つ

○一夜庵にて

庵の名にあふ宿なれや人すまで

哀を告ぐる庭の松風

○伊勢の手洗川にて

吾こゝろ見てさへすかになりけり

手洗川の水の清けさ

○三豊郡稻積神社に詣て、

下向の砌雨に逢ひて

旅路ゆへ身は白鷺のぬれさきの

ぬれても思ふ敷島の道

○橋

谷に啼ましらの聲も程遠く

あゆみもなつむ木曾の懸橋

紅葉散る谷の土橋錦めて、

をしくも鹿や立渡るらん

木樵らか踏まぬひまこそ茂り合へ

谷に懸れる苔の岩橋

行通ふ人しなれば虹かどそ

見紛ひにける眸の懸橋

神代には有てふ物を今は只

史にのみ見る天の浮橋

來る人も歩み馴れすははひ渡る

かつらの橋の彌怒ろしき

友どちの來んと聞くより打出て、

板を調ふる前の棚橋

兵士か仇のすき間を計り得て

又は巧にかけし船橋

架け渡しいつくもわれと今も尙ほ

名にめてらるゝ瀬田の長橋

難波津に名を長々と留めけり

長柄の橋は朽ち果てしかど

○小松殿下御手植小松

うち日さす宮の名にめて御手つから

植てしからに千年榮わん

○忍 草

我宿の軒端におふる忍草

人目もはるはたち茂るかな

○浮 草

世の中のうきことくは浮草の

うき根を絶わて遊ふみやひを

○社 頭 松

葛かつらみしめの如くはひ懸る

片山さとの神垣の松

○盆 栽 松

わつかなる器の土に根をしめて

操正しく榮ゆ松はも

○岩 松

あらかねの土には多く生はせて

名には負かぬ是の岩松

○勅題海邊松

はなれそに松のこたれて千年経る

色に色そふ浦のさゝ波

○勅題朝晴雪

朝日かけ外國までも照り渡り

到るところの雪やとくらん

○琴

憂き事も愛たきこともうたふ哉

糸を知邊に音を調へつゝ

○人 面 石

ことならば玉もあらなんにかたの

石にしあらはことも問はれし

○忘 貝

世の憂を昨日も今日も忘れ貝

拾ふて暮らす春を樂しき

○松 山 鶴

御園生の六十路をふりし松か枝に

千年を契る鶴の初聲

○琴 彈 公 園 鶴

限りなく榮ゆる松の緑葉の

かけを千歳の友とすみつる

○蝙 蝠

鳶のはふ一つ家なれと賤の子か

蝙蝠よひて夕賑ふ

黄昏に子等か打群れ呼ひつゝも

手つさふ業を慕ふ蝙蝠

○みやひの人

家のなりいそしみつゝも花鳥に

心慰さむ人はよき人

○みやひにふける人

敷島の道のちまたに迷ひ出て

家のなりをも忘れたる人

○みやひなき人

花は咲き鳥は鳴けども樂しまて

浮世の中に壽を送る人

○日本軍人

散るへきは深く散り残りても

色香世に無き山櫻花

○小 人

白かねや黄金に己か目は眩み

道も分らす成にけるかな

○君 子

道を踏む人は黄金をはかり得て

苦しけれども樂しかりけり

○父君嘗て汝聊たりとも力を

王室に謁しみやこを太らせ  
とてみやこたるふと命名せ  
しと語られしを思出て、

たらちねの親の給ふは名のみにて

世に功なき我を悲しき

○皇后宮より福羽美静先生に  
賜ひし品を裾分けに賜ひし  
時詠める

梅の花匂ふ隣はおのつから

手折らぬ袖に移香をする

○福羽美静先生か宮内省に仕  
をすゝめ給ひし時よめる

藻にすむも吾からなれはいと安し

玉の臺に心おかすは

○忠

真心の心の限り家も身も

忘れて君に事へまつらん

真心の只一すしを大君に

盡して家も身も忘れけり

○日本魂

西風は吹くともよしや芳野山

花の色香は變らさりけり

○明治三十七年二月宣戰御詔  
勅ありしより毎日戰勝を祈  
りつゝ、

天地の神を知るらん大君の

人いつくしむ一すしの道

○明治三十八年正月十五日露  
國退治の祈禱を爲さんどて  
垢離を取り天拜壇に登り謹  
んで奉詠

あめつちの萬の神も知り給へ

わか大君のまこと一つを

○同じ時に我老の身の嚴寒に

家の名の大山のこといや高く

動つみ立てかへる君かな

○出征軍人の勞苦を偲ひて

老ぬとてなど息らん耕しを

いくさの庭の人し思へは

皇軍のことのはこひの宜しくは

耕す老も足のかるさよ

○大正七年十一月獨逸敗退に  
付琴平宮へ御禮參りの歸途  
山々を見て

常磐木のあい紅葉うすく濃く

色こき交せて如何に宜しも

○征露記念に茶釜に歌書きつゝ

此茶釜かな氣出る迄年経とも

露西亞と降さてやまと魂

○征露

垢離を取る事如何にも堪ぬ  
かたからんと妻の潛かに垢  
離を取りて老の身の祈禱中  
堅固なれと祈りしといふ事  
を人より告げ來りたる時

國の爲あたいのらんと捨てし身を

安かれと思ふ妻こゝろ哉

○祝凱旋

國の仇露西亞打懲らし日の御旗

四方に輝し歸る今日はも

四方八方に旭の御旗輝し

かへる軍の人の雄々しも

○明治三十九年一月一日旅順  
陥落の一週年なればよめる

かちどきの聲に引かへ今朝白す

年の始めの祝事のよさ

○大山元帥の凱旋を祝ひて

醜草の露は消ひけん朝日影

うらるの山はいと高くとも

外國の皆おそれなす荒鷲も

大和荒夫はうち定めけり

白露は朝日に消わて菊の花

まさる色香う人はめてける

かねて知る大和武夫かたはさめる

さつ矢に鷲の射留らるゝを

燒鎌の利鎌をもちて醜草を

今日も刈りけり大和武夫は

西比利亞の仇うつ旗ての風強み

草木も伏すか露西亞の都の

○花野柳翁の四字を挿みて古者を祝す

走り出の柳の花のかつらをは

翁はきまさん幾七十路も

○立太子式記念として自然生

の相生松を栽るつるを詠て

とありければ

相生の千とせの松に日の御子の

高きいさを先仰くかな

○香川新報二十週年記念號

山櫻咲き初めしより二十年の

春猶人のめつる花哉

○篠原ぬし七そちの賀に百よ

草にそへて

露霜を凌きて馨る百よ草

百いく年も君はへませよ

○土屋將軍を慰問する時よめる

國の爲真心こめて夜に日に

いそしむ君は神ろ知るらん

○喜田中尉の君に送る

露西亞人を討ちて懲らして武士の

花を咲かする春は來にけり

○喜田中尉の君が征露の馬の

はなむけに詠める

ものゝふの矢竹心の矢の如く

つらぬきかへらん事をこそ待て

○喜田中尉の君の阿波なる椿

泊てふ處に公用を務めある

をとほんとて詠みて遣はす

名にし負ふ椿にとまる春鳥の

安らけき聲聞かまほしかり

○井上主人を訪ふ折り

秋萩の花踏分けて吾くれは

霧もへたてぬ友垣の家

○友人を招く女の奥に

君來ませ新嘗祭共にせん

早稻も刈らさね臼もつかさね

○秋の頃長雨降りつる折都の

友より便りありければ其返

事の奥に

都たに秋のなかめは淋しきを

いくかも暗れぬ殿山の空

此と君我をいたみる殿山は

淋しきも亦樂しかりけり

○友人を憶ひて

有明の濱のはまわの友千鳥

友呼ふこゑに君をこそ思へ

去年君と遊ひしころの近ければ

見る物ことに君を戀しき

○静岡市小野金十郎老兄より賜

りし菊の寫繪を詠みて贈る

うつし繪の菊にはあれと香しく

匂ふは君か心なりけり

年経とも寒さ厭はす雪の内に

笑ひを含む君とわと繪と

○竹の筆を贈りこせし友に

給はりし竹のふみての目出たさに

世の浮節も忘れてそ書く

○富重ぬしの久しく音信なければ

吾思ひ有明の濱の友千鳥

涙のしはく聲を聞はや

○宮本氏の皆の君を想ひて

人ならば言傳ましを挿入の

山の雪解の染川のみつ

○二つ三つ四つてふ文字を頭

に置きてよめる

二つ三つ四つきの眞子よき事を

學べと願ふ親こゝろかな

二つ三つ四つの隅ふみ過またて

吾を知る人世を渡りてん

二つ三つ四つ目の錐のよりくくに

よき事學へ世の中の人

二つ三つ四つに六つ添へ十か十

善き事をせよ世の中の人

二つ三つ四つに一つの數そへて

五つの道をふむ人は人

二つ三つ四つに二つを取るへて

六つましくせよやからはらから

二つ三つ四つに七つの數増して

十に一つも過つな君

○ともり歌

つるやつるつるくくよめぬ歌の

言葉苦しむおその風流男

○隠 棲

山里に棲む甲斐はあり春は花

夏ほとよきす月雪を見て

○先祖の古郷を尋ねてよめる

遠つおや出つ故郷と尋ねれば

おかつきはかり昔衣きて

○木村重成表忠碑の前に於て

我祖先も共に戦死したる事

を思出て、

君と我みおやも共に亂れ世の

うきにしにける昔悲しも

○述 懐

なき事をいはれの池の波ならぬ

身の苦しさを誰に語らん

若かりし時は春風面白し

今は頭の鳴るこわひしき

業はいに雅に事を取ませて

思ふか儘にならぬ世ろうき

吾が行かん道は外なし數島の

大和心の一すちにして

○六十ちあまり三年の頃病中

の述懐

長らへて甲斐なき己か身なれ共

御代祈るこそ樂しかりけり

○折りにふれて

世を詫ひてこの殿山に入りしかと

柴の垣根も卯の花は咲く

○所 感

有漏無漏に道てふ道は數多あれと

誠の道を踏む人そなき

○林子平君の六無の歌に倣ひて

力なし親なし子なし錢もなし

動なければ生くる甲斐なし

○辭世

死ねど又生れくゝて幾千度

國のめぐみにあふ由もかな

吾友の先つみまかりし君達に

榮ゆる御代の様を告げまし

大神のみこと畏みあかる世と

まかる我身を如何に嬉しき

○奉吊 大行皇帝陛下

くまもおちす天照らす日の影かくし

悲し心を闇にありける

○宮本家の追善の手に

しゝしもの膝折りふせて亡き君か

魂呼びせん今日のゆ庭に

○今田千代刀自のみまかりけるを悼みて

なへて吹く秋風なるを紅葉の

先つ散りはてし人の哀れさ

○片桐主人の母刀自のみまかりければ詠みて遣はす

はゝろはの森の紅葉は散りはてゝ

頼む影なき君を悲しき

○寄國祝

外國の人仰ぐらんあめの下

たくひ又なき天津日嗣は

○寄山祝

七そちの齡にろへて百重山

百たひ數へ君を祝はん

七そちの坂をも越ゆる君か代を

常盤の山にたくひてしかな

○篠原ぬし七そちの賀に寄竹祝

吳竹の千歳の影を七そちの

君か經まさんためしとを見る

○寄菊祝

一つ咲く花の色香は世にめてゝ

又外國の菊はきくかは

外國の人皆めてん敷島の

大和にははふ白菊の花

○寄蘭祝

蘭いく千代かけて野に山に

匂ふ色香を君にたくへむ

○寄萩祝

秋の野に咲つる萩の錦こそ

君か心と末たのしけれ

○秋山秀樹か四十二の祝ひに

寄梅祝といふことを

今年より老木の梅と人めてん

長く馨らせ吉原の里

○東京氷川柴崎宜和父宜弘結婚五十年を寄松祝

五十年の後も君こそ相れひの、

松にたくへて千代榮わませ

詠史之部

○僧月照

世をかこちみくつとなれと久方の

月にまかへる胸の白玉

○袈裟御前

けさ見ればよへの嵐に誘はれて

散りし櫻の花の哀れさ



○常盤御前

常盤色の松とめつれと浅き深き

緑の程は誰か知るらん

○中納言藤房卿

委こそ都をのかれ真心は

大君のへや離れさるらん

○楠木正成卿

湊川身をつくしても仇波を

くたく心の深き君かな

一筋に流れて清し湊川

水の心はなみならずして

○乃木大將

攻難く落ちすことたのむ露西亞人を

此てかのでて降す君哉

○大山滿洲軍總指揮官

海に陸に兵を備へし露西亞人を

討定めたる勳雄々しも

○八幡公

御軍に心つくしてみちのくの

君か忍ふの事をこそ思へ

○孟母

機ものゝ中を断切り學ひ兒の

倦むを勵ます母の賢さ

○櫻井訣別

國のため残す一木の若さくら

君か御階に咲き匂ひけり



○燕石先生畫二葉一花之蘭春畝來加一葉松菊贊之

予亦在席賦一絕擬之

二葉春蘭趣味深。更加一葉訴吟心。看他幽谷好君子。花吐芳菲發上林。

○予與天誅黨熊野按劍坊及前川直衛君訪源義方翁

木曾山郷翁有詩按劍和瑤韻(磨刀按劍兩用)

皇室徼々何耐情。磨刀每夜夢難成。勤王志士黨誰我。欲獵白狐尾引城。

註曰 江戸城謂白狐山尾引城。

詩文

○元旦

夙向東方賀吉辰。輕風更覺老顏新。何圖白髮今還黑。恩澤正知沾病身。

○海棠

園裡栽花木。當春鬪衆芳。含烟凝媚態。帶雨迥紅裝。風恬西施睡。誰知是海棠。

○春日訪玉田白圭翁於箬藏寺

訪朋箬藏寺。山路絕塵心。花發留羈客。鳥飛還梵宮。風來溪雨過。月隱嶺雲深。一宿探清趣。窓前琴筑音。

○旅中見梅花

奇寒捲雪襲吟身。龜手凜然堪苦辛。偶見隴頭梅一樹。紅脣含笑駐行人。

○春日遊有明濱

蒼樹刺天山枕江。春霞出海薄斜陽。客去園中自幽趣。松籟和琴牽興長。

○春夜遊琴彈公園

人去興來催一園。長橋過處恰仙源。松風有和琴音響。無月明濱漂月痕。

○正月三日井上君席上分韻得新字把筆之際大西君來

年頭訪友祝佳辰。對座清談吟意新。嘉客更來加一興。豐肴漸次酌清醇。

○春日遊吉野山

遠上芳山路々芬。遊人絡繹日爲群。誰言春色千金直。一簇櫻花似白雲。

○春日訪內海君有詩次其韻

詩懷歌旨上吟程。雨後杏花香氣清。親友之家何處所。窓前鶯語兩三聲。

○山家梅

寒威裂地迫松扃。樹上吹風何忍聽。別有梅花護山叟。凜然欺雪立南庭。

○寒月照梅花

滿天晴處晚風微。地上霜威逼風幃。月照梅花花似雪。清香好向玉階飛。

○梅

清香馥郁襲吟心。忽見雪中開玉唇。憐難黃鸝獨呼我。荒村誰又賽花神。

○春日井上梅園寄詩觀音寺僑居次其韻

路々吟筇何用車。明濱日々釣游魚。思他親友一人少。偶有芳音慰起居。

○春日訪內海隣杏君

偶出柴門興味加。行看粉蝶舞蔬花。川原駐杖訪詩友。童指前村紅杏村。

○春日訪梅花書屋翁

吟筇乘興步川原。黃鳥聲朗意自溫。行看溪村總梅樹。仙人尋處亦仙源。

○春雨連日

連朝連夜雨蕭々。高臥山莊不寂寥。誰識先生座外。桃花盡處柳眉嬌。

○春日長善寺

破霞山路度羊腸。隔湖前村鐘響長。忽到梵宮林外立。春禽叫處百花香。

○春日訪望月君

訪友山中三月天。相逢祝健話前緣。交情共暖旗亭酒。酡顏敲句不徒然。

○春日閑居寄諸友人

春日芳庭花發時。昔遊何處爲追思。梅梢呼起鶯聲燕。暗哺友情爲一詩。

○春日雨中獨坐

春霄風靜雨蕭々。門外無人狐兔驕。樂此幽居茅屋裡。沈吟獨酌樂箏瓢。

○春日自一谷赴須磨途中

稚樹櫻花已滿開。日惶風雨付紅埃。攝山春風須磨寺。日日遊人追暖來。

○春日遊琴彈公園見赤松翁次其韻

砂明水碧曉濱灣。象鼻捲霞遮世寰。洗耳滿園松籟響。果知仙境在人間。

○甲辰仲春與友人井上靜邨遊于下高野

十里桃林花又花。靜邨花間如帶引春霞。殿山吟行時訝仙真裡。靜何處香風人萬家。殿

○春日過櫻井驛址

春風蕭々芳草碧。我來駐節櫻井驛。憶起當年訣兒時。訓誨忠君無寸私。自非聖哲南木氏。朝家知正屬阿誰。遺憾廟堂誤賞罰。牝雞之晨不曾知。龍種遭害藤公隱。歎息自是墮鴻基。如何輕薄亂離世。日域有誰奉王師。請看人世如草花。花爲風雨破艷姿。浮雲長掩日月暗。憂國之士長含憾。奸賊欺得國家權。惜哉大運俄然遷。廟堂若用公之策。何得虎狼渡港川。

○旅中驟雨

奔雷白雨動長松。風送清涼興轉濃。忽見東天一峰霽。青雲削出白芙蓉。

○古城明月

露滿古城秋氣清。無風夜半只虫聲。主公今又在何處。明月照荒臺獨明。

○川原秋興

秋草花開川上香。無心童子躡牛羊。水聲爽潔思長壽。吟步更忘到夕陽。

○重陽

重陽無俗自仙真。紅樹淺深遶殿山。更撫綠松小園裡。吐香黃菊對酡顏。

○秋日遊栗林公園

紫雲山下栗林景。紅葉搖風秋氣深。多少遊人歸去後。岩頭獨坐弄吟心。

○秋日山居

山妻紅葉煮蕪羹。烟渡前峰秋色清。更有愁猿叫殘日。閑人不管弄詩情。

○重陽應松南兄招

鵝湖山下景增加。紅葉淺深斯見花。重九逢招曳吟杖。白衣黃老叩仙家。

○多度津早曉

秋空一望黑雲晴。漁水光藏筆海明。曉對江山萬林裏。家纏紅葉錦環城。

○天長節觀菊某氏園

吟杖乘閑敲竹門。偶逢佳節憶天恩。今朝爲祝見黃菊。花吐幽香滿一園。

○殿山耕樂亭秋吟

稼穡隨時作。一身只任心。亭邊三徑發。野獸戲家禽。羹芋燒紅葉。炊烟淡竹林。朝看園裡菊。暮試晚秋吟。

○多度津新港眺望

筆海連新港。山陽若畫中。丹楓榮七島。秋色滿清穹。松影蒼龍動。長堤欺白虹。更憐名利客。徒步作交通。

○中秋後過川中島古戰場

甲越之山翠連天。吾來飲馬筑摩川。碧水一道自爲島。滿空翠雲颺炊烟。舊址知是繁華市。獨聞汽笛雜管絃。水聲洗胸懷爽潔。川原疲馬嘶不眠。君不見好景如土名

利客。雁聲斷續懷昔賢。孟德風流果無似。仰天追思益不己。憶看英雄古戰場。世變百態人知否。剛氣吞敵氣如霓。縱橫疾馳千兵裏。任他一劍逸長蛇。雌雄未決兩虎死。人間所願如春花。春花年々不改美。人間再出自難期。齋志日月不相俟。事之成否總有時。憐君不渡鴨河水。

○初冬晴曉

霜滿萬田冬夜清。播麥農歌笑語聲。更好天誅街外月。殿山拂曉半村明。註曰 殿山麓有天誅町。

○初冬訪井上松南

先生得々過溪間。行見紅楓錦色山。雨霽上天促幽趣。一朝乘輿叩仙竇。

○其二歸途口占

暮辭親友出仙竇。數越鷹山向殿山。落日蒼茫山吐月。行看仙境絕人間。

○初冬田園分初冬字得冬

晏天已盡入初冬。眼界田園興轉濃。互對茶爐談落々。籬邊殘菊攪吟胸。

○右同得初

雨霽農夫植百蔬。籬邊日影欲殘初。楓林更好磨幽趣。田畔閑吟又把鋤。

○飯山曉望

刺天高嶺戴長松。千歲蒼々不動容。紅旭炊烟映山腹。愛看東嶺小芙蓉。

○謁楠公墓

嗚呼無二大忠誠。今日謁君何耐情。碧血生來春艸裏。只存古墓鳥空鳴。

○下木曾川二首

木曾激瀨下輕舟。山媚水明忘客愁。更煮細鱗說韜略。豪僧按劍舞鸞頭。註曰按劍者按劍坊也

雨後長堤柳色鮮。棹輕舸下木曾川。急流水怒虎狼吠。

御岳山頭聳暮天。

○時事

諸冊產蒼生。至尊又導誠。仁風化夷狄。軍術萬邦驚。

○賦小詩奉慰伊藤公神靈

嗚呼誰不死。死作節操全。魂去九天上。名留幾萬年。

○偶成

殿山耕處聽新鶯。躑躅花紅四月天。聖代人無曾洗耳。喘牛幸得飽甘泉。

○次井上竹外韻

風光好處在林間。養得吟情物外天。御殿山頭松菊主。更爲耕樂廿三年。

○時事

古來吾國謂神州。人長干戈重帝猷。夷狄豈知仁政有。獨願小技窺神州。

○和耕雲居士韻

耕樂先生避世塵。殿山風景養心神。一庭松菊三間屋。朝暮采薇醫我貧。

○有感

廟堂仁政化諸蠻。北狄狂奴獨傲頑。寶劍在腰鳴不止。膺懲將築鬪骸山。

○三谷象雲詞兄有謁東都栗山先生墓之詩和其瑤韻

栗山翁去百年呼。嘗聽墳塋在草蕪。人慕雄文時吊此。鳴斯南海一名儒。

○日下部翁有詩和其瑤韻

想昔忠臣尾叢時。天恩未報又勝悲。削櫻揮筆賊無識。獨靖宸襟二五詩。

○偶成

煦々斜陽照小園。牧童驅犢入柴門。妻採丹楓烹白石。烟影橫空山下村。

○夢中有感

憂憤一宵奈國難。楠公入夢勵忠肝。古今義士蓋臣魄。共使兇奴心膽寒。

○有感

丹心報國誓天神。數戰猶存病瘦身。四拾餘年遠宿志。空將書劔老風塵。

○祝田岡君和瑤韻從軍

日域堂々舉義兵。從軍壯士總忠誠。知君共斬露王首。更赫皇威於北征。

○凱旋

兵馬堂々向北清。直平狡寇拔諸城。凱旋蔽海幾千艘。山岳爲鳴萬歲聲。

○戰馬功

一鞭千里鐵蹄輕。直向敵軍殲萬兵。請看關塵收而後。聖恩所浴滿城聲。

○白峰懷古

伏思千古昔。仰見白峰空。瀉落岩頭外。烟登一碧中。樹間存古寺。舊跡有荒宮。掃淚拜階下。更寒陵上風。

○芳山懷古

英雄栽樹木。茲事已千秋。三月櫻花發。香風吹不休。夕陽人漸去。春色但空留。更憶別天地。九郎舊此遊。

○白峰懷古二首

牝雞長舌亂邦家。鳳輦南遷恨益加。伏嗽溪流沃岳壑。仰望山月上雲涯。荒陵落日賽人絕。古寺晚鐘宿鳥譁。杜鵑吞聲去何處。山頭拂淚對殘花。

保元事々思茫茫。寰宇終無計苟安。猶恨牝雞擅長舌。更教壯志付慨歎。雲封南海龍潛梁。乙卯○○夢堪看。只是松山陵上月。滿襟暗淚伴秋寒。

○贈羽形村篠原君

和魂一片主攘夷。正氣所存天地知。嘗膽十年甘累棧。

○韓國合邦

日東政化及韓民。事々仁々日々新。八道風光收掌上。正知萬里太平春。

○西野文太郎君殺森有禮

洋狂失禮穢廟堂。神怒假人誅賊臣。足戒後來無考者。神州面目自之新。

○征露

和魂吞敵氣豪英。一臂一振塵萬兵。烏合露人何足數。先屠得哈爾賓城。

○和梅里君韻

男兒決死出鄉關。鐵石和魂克耐艱。百萬何多同誅萬。凱歌聲響滿洲山。

○吉野山懷古

栽櫻人去已千秋。萬古誰憐骨肉仇。英傑爲何作斯事。無情春鳥弄花遊。

幽情半世處難危。沛公何忍鴻門劍。張子空謀博浪椎。

成事英雄真是美。尊王首唱不君誰。

○國光

日東帝系冠萬邦。地味膏沃生嘉禾。山嶽秀靈風土潔。陰陽調和貨財多。古來仁君政績美。許國忠臣甘萬死。群黎百姓長干戈。習俗多是慷慨士。嗚呼法國大帝那破。皇國男兒常奴視。鴻業巍巍芙蓉山。皇統綿々琵琶湖。水。請看神州太平基。千秋萬古無窮期。何似成湯征葛伯。萬機嘉猷化四夷。

○有約訪小香兄

季公無二諾。况我有和魂。冒雨凌辛苦。吟筇叩竹門。

○訪松南兄席上分韻得情

雨後帆山秋色清。夕陽光照殘紅明。相親品字坐中友。更和詩歌交暖情。

○訪岡本章庵先生於上總

崔嵬一路訪仙家。一片閑雲隔世譚。強記已窮天地理。文宗白發筆端花。

○訪井上松南詞兄席上作

互發胸襟暖斷金。奇談落落夜沈沈。主君揮筆雲烟起。當世更思小竹林。

○小松君來訪

澄然親友至山莊。舊識言々又自香。休說虎谿三笑事。無端望別惹情長。

○戊申首夏訪阿州辻町仁尾小香兄

突如冒雨訪詩仙。家避世譚傍井川。更羨與君談交友。言々含雅入新篇。

○明治四十一年九月五毛東條重吉君與吾見招井上松南兄席上醉興

重陽酌酒坐高樓。詩畫彈琴忘百憂。落落清談堪笑語。更排俗塵作遨遊。

○有約訪小香兄不遇

含貌香盡斷青烟。林外歸鴉噪暮天。山寺鐘聲驚奇客。清談未聽聽新鶻。

○井上梅圃兄訪予途上有作次瑤韻

雪殘仙嶺映青天。象鼻捲霞風景全。此日會朋杯酒外。互揮醉筆弄春烟。

○堀家清君示詩予次其韻

延元事蹟欲尋難。偶誘山叟子細看。血泣杜鵑過陵上。更拜膚魂淚雨寒。

○謝三好林八君惠硯

惠來瓊玉硯。朝夕伴文房。非李廷珪墨。未曾試電光。波濤扶素滑。象管被濡長。愛玩不離側。厚情豈亦忘。

○井上梅圃兄見惠魚賦詩以謝

親友惠吾魚若干。携歸不啻潤妻餐。山厨忽富飢貓躍。坐客歌停長缺安。

○祝香川新報二十週年紀念號

健筆揮來二十年。秋毫不洩入新篇。分明事々六千號。爲祝今春四月天。

○寄松竹梅祝菊野令閨初老

梅發香風伴老松。虛心翠蓋午陰濃。請看各有結良實。爲比歲寒三友容。

○祝有總梅太郎君華甲

老梅一樹萬枝新。鐵幹冰姿厭世塵。更養花神象山下。清香馥郁幾千春。

○春雨中得高山君之訃愴然有作

得訃關東淚雨寒。故人香骨已埋韓。多情鳴鳥來梅上。春雨雨中助永歎。

○祝井上直三郎君誕日

壽誕恭逢九月天。壽全何事自皆全。壽親重視青雲器。壽酒伴有開盛筵。壽竹彈琴呼萬歲。壽堂龜鶴舞千年。壽觴舉日坐頭客。壽任斯君不老仙。

○勅語奉讀

恩諭生誠感。信言徹衆情。臣民奢化質。百行自新正。四海仰威德。萬邦慕聖明。和魂更琢實。好是奏強兵。

○兔裘歌

人必兔裘有。下則因紛紜。上則原天運。古今見史文。大丈夫在世。豈徒願隱倫。勢出不得已。諸葛南陽云。管寧遼東帽。溫公獨樂園。如夫魯公者。皆能旋乾坤。嗟我獨不能。愚亦不足言。今日始悔悟。漸解憂國煩。他評何足憚。軒免猶視塵。身等執鞭士。心遊湘水邊。

○楠公

陰雲屏四海。天日永亡光。猛虎躍宮闕。祥麟去帝鄉。嗚非南木氏。何耐北風強。賊賊七生誓。感人萬古長。

○楠公

忘家殉國義人常。何況楠公奉吾皇。滅賊七生臨死誓。一言長駐萬年香。

○小楠公

許國忠誠百鍊心。妙詞題壁意更深。請看進退渾爲法。養得高操又可欽。

○新田公

苦辛百戰斬鯨鼈。得失何論守潔操。真意所爲天地動。正知海若受金刀。

○兒嶋高德

蒙塵夫奈暗雲遮。何計蓋臣勤帝家。忠慨題來十字詩。筆花香似艷陽花。

○畑時能

落日蒼茫夜色清。伊山躍馬氣豪英。呼聲徹耳仇人駭。一戰屠來卅七營。

○大石良雄

欲復君仇鐵石衷。百方奇策是英雄。人情難忍花街戲。呼奮呼狂何勳忠。

○村上義光

藏王軍敗奈孤城。龍種存亡難計情。慷慨請衣欺鎮賊。精忠一死駐芳名。

○上杉謙信

陣門橫槊向旻天。北越風光藏一篇。俠氣驚人奸冷膽。休云孟德匹儔賢。

○源右府

配所孤身學寡兵。忽誅亂賊拔諸城。百年天下小康象。可惜更無兄弟情。

○源義經

脫却緇衣欲復仇。更思一日若三秋。上成忠下酬亡父。只有家兄信謗憂。

○重盛公

亟々諫父不臻姦。忠孝未全心更艱。勇帥三軍仁動地。惜哉君早去雲間。

○平忠度

欲向狐川返馬頭。師門臨別又何求。獨留吟詠千古後。衆口今稱平薩州。

○文天祥

宋軍已敗奈無籌。國滅君臣作楚囚。獨憶廟堂忘得失。忠魂凝結駐千瓊。

○巴御前

薙刀跨馬氣豪英。軍敗縱橫衝敵兵。偶有驍騎欲生獲。一鞭斷袖揚聲名。

○楠公

陰陽秩序亂如麻。急起怪雲天一涯。紅日光收鷲鷲舞。中原晝暗虎狼奢。北風偃草捲王土。南木垂枝護帝家。請看武臣忠勇鑑。五洲大陸有誰加。

○妹濱女病中偶成

獨插毛詩琴瑟篇。頻惱心魂淚潸然。鴈影橫斜催感去。

砧聲斷續萬家眠。風搖庭樹夢難結。憶起慈母有姪年。

煎藥三旬護阿妹。百年愁緒欲還天。

○乃木將軍殉死有感

將軍百戰氣尙雄。數降強敵奏偉功。鯁直事君以誓死。一身渾是義與忠。天日收光晝暗澹。戶々喪旗垂不撼。君知一死不啻殉。聖皇德。汚吏情夫亦皆感。和魂放光乾神耀。自使大洲豪傑士更寒其膽。

○弔天川戰死諸友人

明治辛亥當五十年忌辰不堪追憶聊賦無詩以弔諸友英魂

王政漸衰霸業起。將軍亦苛政不已。志士誰忍苛政多。欲計復古皆誓死。復古不成死不瞑。魂魄唯願爲雷霆。雷霆願是擊仇敵。仇敵不滅會不停。壯士寄魂三尺刃。縱橫疾馳衝堅陣。銀山援兵終不至。苦戰多斃南和地。精義忠勇只報公。天下誰不靡此風。萬邦於我強無比。故人心成誰不喜。憶見香骨已生苔。千行血淚沾袖來。嗚呼幽顯隔絕難傳言。聊述慨歎吊英魂。

○題屏風畫

三祖誰人寫。一枝朱果肥。烏常疑不啄。終歲襲金衣。

○題秀吉撫賴朝像圖

日本有豪傑。其人以智鳴。恩威迎德望。賞罰買衷情。々動鉄鉞。年々事遠征。曾願源將像。巨膽欲屠明。

○題呂尙鈞渭水圖

每遊渭水一心清。垂釣悠悠託半生。忽退石床傍玉座。六韜三略博芳名。

○讀三谷象雲撰吉田少佐碑錄

象雲影掩幾千碑。戰後名轟曉將碑。忠烈為皆流血淚。休云西域岷山碑。

○爲琴泉君清瀾詠琴瀾君能畫因有此作

水落貓峰入碧灣。瀧如琴瑟響溪間。古來秀嶺產英傑。蒼樹刺天邦吉山。

○題曹操困於周瑜之圖

赤壁含波吐水光。英雄橫槊弄詩腸。何計江船羅炬火。

已知孟德窘周郎。

○題七槍圖

兩虎爭來賤岳鳴。把槍猛將斃強兵。豐家快戰千秋後。好是人稱七勇名。

○鬚

長鬚豈學縉紳人。此者仁柔慰一神。時防寒風胸臆暖。襟邊拂處無浮塵。

○文房五首之一

副島先生見送書。一書興味善於魚。入章出筆四文字。此意誰知伯與余。

○筆指

廢物古龜三足高。可憐鼎立水馱毫。卅年映雪未成用。吾耻聊無酬爾勞。

○吊伊藤博文公

明治己酉某月某日三好京太郎謹裁拙笏之文吊故統監府長伊藤博文公之靈京也曾客燕石與公數相見於木戶之家而雅談終度憂國相共語曰大丈夫爲國死榮無大焉京也爲討幕到天川戰後數患眼因隱於東讀大仙之下四拾餘年而公益顯京益微加地遠隔是閣下之庭無京之跡也久矣聞閣下爲國遭刺客吞聲而哭把筆而羨京不幸而未能果前言抑彼敵視公所謂老子之少仁義也今也國家要英才之秋也當此時如何狂奴亡此不世出之才嗚呼惜哉嗚呼哉天何不爲冥助之甚矣聊作吊文以鳴悲痛之情云。

○耕樂亭記

亭在土器川之西隔海較遠頗稱靜間亭外多圃栽梅桑二樹及茶或放諸禽畜雜獸禽飛而無禁獸走而無柵培養得宜氣候循環若芽焉桑茂焉梅子熟焉梅子採之調羹若芽摘之以製茶桑葉採之以飼蠶製絲其勞不一而足矣雖則勞乎及未

寒絹帛既成以防其寒無論其稻梁登場也已非有勞功安得

享其樂則天地間之樂豈有加于耕者哉抑自古豪傑不遇之士樂耕而養志蓋耕之理順天之時依地之理也推而論之聖賢法天象地以字民皆同一歸也余夙有見于此因命之曰耕樂亭。

○清泉記

讀岐土器川畔上有山其中央有甬道隆別莊人稱其山曰殿山山麓有泉出于岩下水清味甘水源彌望矣維新以來開墾其山爲田圃庶民穡負來耕數年作小邑耕者皆汲其泉而飲之飲久而心彌清聞者感其如此有請予於記者予以不肯辭而請者不止日記事實不待良史也君幸居此久矣請記之遂馳禿筆云。



五條の戦敗れて殿山が間道を京師に志し生駒に出でんと潜行する時の或日、髪をおごろに振亂し顔色憔悴して歩行にも悩む許りの十二三歳の少女が、消ねも入りたい様子で潜々と泣いて居つた、尾花薄の影にも驚かざるゝ落人の殿山も、此悲痛な實況を目撃しては見ぬ振りをして行過ぎることは餘りに其仁侠の心を棄てるべく怯懦であつた、馳せ寄つて其背をさすりつゝ、様子を訊けば、打續く戦亂に家を失ひ食を失ひ母子諸共住み馴れた故郷を餘所に彷徨ひ出たが、久しき絶食に病み衰へた母は終に餓死の惨しさを見たので、牧者の杖を離れた仔羊の夫れ、哀れな孤兒は冷ね行く母の亡骸を抱けて、愛別離苦の斷末魔に其の身も跡を追ふべく悶ねて居るのであつた、悲絶！慘絶！人生亦斯る哀痛の幕があらうか、殿山は直ちに生命と頼り腰の握飯を少女に與へ躬ら澗水を汲み來つて飲ましめつゝ、懇に愛撫の温い手を捧げ、後振り返して若や敵の追窮もがなと身一つに二つの心を配りつゝ、何とかして亡骸を假葬しやらんと苦心した。折よく二名の樵夫が通り蒐つたのを幸に、亡骸の後始末と少女の身の上を頼めば、朴訥な野人は快く承諾して後に心を許さずに落行けよ、天誅組の武士と見ては猶一廉の厚意を竭さぬを得ぬと劬つてくれたので、殿山は深く其深切を謝しつゝ、目ざす方に落延びた。

老軀を臥褥に横へつゝ、徐ろに懷舊に耽る殿山翁は、時々此慘狀を目前に描き、あの少女の其後は何うなつたかと、熱い涙を流しつゝ訪づれる人々に物語る。

## 跋

木の崎川の清湍脚麓を紆縈して遠く駛せ、象頭山の靈峰雲際に翠黛して近く招く所透迤たる連丘低く高く拓け、籬落點在疎林の間に低迷するものを殿山の環域とす。鵬翼傷ついで雄圖幾度か差ひ、風雲の會を他ににして空しく蘆葦草澤に下り、鬱を詩歌耕讀に遣り懷を草茅危言に洩らし、荒蕪を拓き後進を導き、造次顛沛にも皇室國家を忘れず、起居談笑にも敬神報效を懈らず、謹恪なる操持熱烈なる忠悃、兒童走卒をして猶傾葵せしむるの高士三好京太郎翁は、實に此地に閑棲して餘生を花鳥風月に托しつゝあるなり。

前郡宰北野右一氏其高風節義に激するところあり、翁が功績偉業を顯彰するご共に世道人心を裨益すべく、川崎叱天氏に囑して其事蹟の蒐輯に力むるや久し、本年四月氏病を以て挂冠し予乏しきを其後に承くるや、翁の風格を仰ぐの念深甚を加ふるご共に、前矩を紹述して其遂行に盡さんとの望益切なるものあり、蓋遺賢の洪徳を

賛して其芳烈を傳ふることは、啻に人心肅清高士優遇の道たるのみならず、公人として將私人として社會奉仕上當然の竭すべき條理なればなり、今や稿成りて梓に上るに際し、前人の遺志が達成せられたるを欣するに共に、本書編輯の目的が將來克く其徹底を見んこの期待を繋ぐこと大なり、想ふに此書を繙く之士君子は、必ずや慧眼以て其潜在せる眞意を看破するの明あるべし。是予が衷心の希望にして後援者及び編者の欲求亦是れに外ならざるべし、乃ち一言を卷尾に録す。

大正十年初夏

杉 梅 之 治

大正十年七月卅日印刷  
大正十年八月七日發行

\*\*\*\*\*  
内務省  
届 濟  
\*\*\*\*\*

編輯兼 川崎宗一郎  
發行所 香川縣綾歌郡坂出町  
三千七百七十九番地ノ九

印刷者 武内達次郎  
香川縣綾歌郡坂出町  
三千七百九十一番地第三

印刷所 綾歌印刷株式會社  
香川縣綾歌郡坂出町  
三千七百九十一番地第六

11  
48/

終

